

2017/11/19

## 「幼子に学ぶ」

イエス様は、子どもから学びなさいと仰いました。今日は、子ども達から五つのことを学んでみたいと思います。

### 1. 自分は助けを必要とする存在であることを知っている

皆さんは、自分には助けが必要だということを認識しているでしょうか。自分には助けが必要だと思う人は、神様の恵みを受け取ることができます。自分に助けはいらないという人は、神様からの恵みを拒否してしまうことになります。

人間は生まれながらにして、誰でも助けを必要とする存在です。親の助けを受け、人の助けによって成長し、老いることでまた助けを必要とします。私たちは全てに於いて助けが必要な存在ですが、それを認識していることが大切なのです。聖書にこうあります。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（マタイ 5:3）

「心の貧しい者」とは、ギリシャ語の「物乞い」を指す言葉です。本来の意味は、「極貧状態」であり、この御言葉が伝えていることは、「自分の心が極貧状態（物乞い）で助けを必要とする者であることを知っている人は幸いです」という意味になります。そういう人は、神の恵みを受け取ることができます。これが、まさに私たちと神様との関係です。私たちは、ただ神様から助けを受け取ればよい関係です。

神の恵みは、何か頑張ったから受け取れるものではなく、太陽のように、誰の上にも注がれていて、何の代償もなしに受け取ることができるものです。幼子は、それを当然の必要として受け入れます。しかし、自分は大人だから助けなどいらない、自分の力で生きていける、もしそう思っているなら、神の国は遠いということです。

私たちが幼子から学ばなければならない第一のポイントは、自分は助けを必要とする存在だということを素直に認めることでしょう。

### 2. 本音と建前がない

幼子は、本音と建前を使い分けることをしません。悲しい時、嬉しい時、その気持ちを正直に表します。神様が私たちに求めているのは、本音での関わりです。私たちが、神様の前に正直に自分の気持ちを言い表すことができれば、神様との関わりは大変楽しいものになります。しかし、建前ばかりでつき合おうとすると、大変つらくなってしまいます。

本音と建前を使い分けるのは、相手に気に入られようとするからです。ですが、神様との交わりは本音と建前ではできません。悲しければ悲しいと言う。これが言えれば、神様をもっと近くに感じ、神の恵みをもっと深く受け取ることができるようになります。

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。」（マタイ 5:4）

私たちは、悲しみを自分の中でこらえてしまっていて、だんだん泣かなくなります。悲しみを隠そうとします。悲しいときに笑ってごまかしてしまいます。しかし、悲しいと思うのは当たり前のものであり、聖書は悲しむ者のことを幸いだと言っています。なぜ幸いなのか。悲しみを神様の前に正直に告白できる人は、神様からの慰めを受けるからです。私たちは幼子からそういう正直な姿を学び、神様の慰めを受けとりましょう。

### 3. 誰とでも友達になる

幼子は誰とでも平和を築くということです。人は年を重ねていくと、次第に人と間に平和を築くのが面倒になり、閉鎖的になり、やがて心を閉ざすようになります。ではなぜ幼子は、誰とでも友達になれるのでしょうか。彼らは、愛されることよりも愛することを優先するからです。

私たち人間は神に似せて造られました。ですから、人間の本質は愛することを喜びとするように出来ています。しかし、年を重ねるにつれ、それが徐々に機能しなくなり、自分が良く思われる、愛されることを求めるようになってしまいました。そして、私たちはそういう自分に苦しみを覚えています。

人の苦しみの原因は、例外なく、愛せないことにあります。人は本来愛するように造られていますから、それに反し、愛せなくなるとつらさを覚えます。それは、体が病気になりうまく動かなくなるとつらさを覚えるのと同様です。

人はつらさの原因を見た目の出来事のせいだと思いますが、問題の本質は愛せないことにあります。愛せないことが心の状態を制約するために、つらさを覚えるのです。幼子が悩んで心の病になったりすることがほとんどないのは、造られた本来の目的どおり人を愛するからです。

「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。」(マタイ 5:9)

人間は本来平和をつくるように造られています。愛するように造られています。私たちは神の子なのですから、もう一度神の子の本来の機能を取り戻す必要があります。そのためにイエス様は十字架に架かられました。私たちは愛することよりも愛されることを求めてしまうので、イエス様は十字架に架かることで、これだけ愛しているよという愛を示してくださいました。そして、「わたしがあなたを愛しているのだから、あなたも愛しなさい」と言っておられます。イエス様は、私たちが本来の「愛する」という機能を取り戻すために十字架に架かってくださったのです。

私たちは幼子を通して、愛することの大切さ、それが私たちの本来の姿であることを思い出すことができれば幸いです。

### 4. 夢を持つ

子どもは夢を持ちます。人が夢を持ち、それを追いかけるのは、実は、神様に近づこうと

するからです。それはどういうことでしょうか。

人間は、神様のいのちを分けて造られました。ところが、私たちは今、神様と疎外された関係にあり、有限の世界で滅びる存在となってしまいました。しかし、神様と疎外された関係にある中でも、魂は、神様は永遠なる方で、自由な方だと知っています。そのため、魂は、永遠なる本来の自分に戻りたい、神様に近づきたいと願います。

ただ、神様を求めてはいるのですが、神様が見えない世界にいる私たちは、神に直接結びつくことができないため、この世の中に自由を求めてしまいます。それが夢です。人が夢を持つのは、神様を求めている証拠であり、それは神様と結合しようとする運動をしているのです。この運動のことを愛といいます。

興味深いことに、様々な分野で夢を追求した人の多くがクリスチャンです。政治、文学、音楽、科学…。ベートーヴェン、ニュートン、リンカーン…。名前を挙げればきりがないほどの人々が敬虔なクリスチャンでありました。

幼子は単純に夢を求めますが、実は、それは神様を求めているのです。私たちは神様に近づき、義（神様）に飢え渴いているのでしょうか。

「義に飢え渴いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。」（マタイ 5:6）

私たちが夢を持ち、神様を求めるならば幸いです。何も求めなければ、それは神様を求めることにもならず、満ち足りることはありません。

「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」  
（マタイ 5:10）

私たちが夢を追いかけると、色々な問題にぶつかり、挫折することもあります。しかし、それは幸いなことです。夢をあきらめないで持ち続けているなら、神様を深く知るようになるからです。

私たちは幼子を通して、夢を持つことの大切さ、それを通して神様を知ろうとするこの大切さを学ばなければなりません。

## 5. 積極的に求める

小さな子どもが、物をねだって、だだをこねているところを見たことはないでしょうか。幼子は欲しい物を正直に求めます。

私たちは、幼子のように求める心を持っているのでしょうか。私たちと神様との関係は、何か待っていれば何かしてくれるというものではありません。神の恵みはただ受け取ればいいものですが、それには「欲しい」と言わなければなりません。神様はあげると言っておられるのですが、何が欲しいかは私たちが言わなければなりません。お店の前に立ってじっとしていても何も起こりません。これをくださいと言わなければならぬのです。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」（マタイ 7:7-8）

求めるから与えられる。これが神と私たちの関係です。誰でも与えられるのだから、求めなければなりません。あるとき、盲人が「イエス様、私を憐れんでください」と言った時、「わたしに何をしてほしいのか」とイエス様は尋ねました。彼は、「見えるようになることです」と言いました。彼の告白を聞いたイエス様は、「それでは、そのとおりになれ」と仰いました。

神様は、「何をしてほしいのか」と常に私たちに聞いておられます。ですから、私たちは具体的に求めなければなりません。しかし、何か求めて答えがこなければ、私たちは途中であきらめてしまわないでしょうか。祈ったことに対して答えがこなければ、そのまま放置してしまわないでしょうか。神様は、私たちが答えを手にするまで、あきらめないで何度でも「何をしてほしいのか」と問いかけ、私たちが本当の答えにたどり着けるよう導いてくださいます。ですから、あきらめずに求めていきましょう。

子どもは欲しいものが手に入るまで、だだをこねて求めます。私たちはその求める心を、子ども達から学ぶのです。

イエス様が子どもたちを前に立たせ、皆に「幼子のようにになりなさい」と言われた、その言葉の意味を正しく理解し受け取りましょう。